

金子宗右衛門の桜献上

—庄川流域エドヒガンの自生にみる一考察—

間 馬 秀 夫

はじめに

砺波市と合併した旧庄川町のナチュラリスト松岸得之助（一九一八～一九九八）さんは、自らのエッセイで庄川流域に自生するエドヒガンと里山に住む野鳥がいかに強く結びついているかを季節の話題を交えて解説された。^{注1}見るからにナチュラリストであつた松岸さんは、鳥のおじさんとしても親しまれ、自宅には生まれて間もないヒナや怪我をした野鳥がもち込まれ、さらながら動物病院のようであつた。

毎年、桜前線が話題になり、花見の季節になると、松岸さんは桜の話題をラジオ番組に提供したり、新聞等にエッセイを載せたりされた。

北陸三県には桜の名所がたくさんある。

しかし、エドヒガンが生しているのは富山県だけで、その自生地は神通川沿いと庄川沿いに限られている。いずれも数百メートルの分水嶺で太平洋と日本海で結ばれているからだとう。

エドヒガンと野鳥の関係を裏付けるように、その若木が庄川合口ダム右岸（庄川温泉ゆめつづり対岸）や庄川の中州（越中庄川荘前）などに育っている。



庄川の中州



庄川合口ダム付近

ながら私論をまとめることができた。

ところで、この古文書に献上した桜が「うはざくら」であつたと明記されていたことから、その関心はさらに深まつたのである。

1. 金子文書

砺波地域には、県内でも有数の十村、金子宗右衛門（旧太田村）、川合又右衛門（旧戸出町）等がいた。十村とは他藩では大庄屋に相当する役職である。加賀藩では初め十村肝煎と呼ばれていて、郡奉行の手足となつて管轄内の村々の農民を支配する有力農民等が地方役人として任命されていた。

金子家に保存されている十村役当時の古文書の大半は、砺波市史編纂の折、『加賀藩初期十村役金子文書』にまとめられたので、読みやすくなつていている。

桜献上の古文書は「174 田丸兵庫、うば桜獻上二付廻状」として収録されている。この古文書は、虫食いがあつたり、擦り切れたりして、内容の一部を判読することができないが、同じ内容の古文書が富山大学付属図書館に保管される川合文書の一冊、和綴本『往昔御紙面等之写』^(註3)によつて、その全容を推察することができる。

この和綴本は、郡奉行から十村らに通知した内容を書き写したものである。いづれも四百年の歳月を経て、大名の書状と同

様に保存されてきたことは、加賀藩財政を支えた穀倉地帯の十
村役の重みを感じる。

まず、金子文書「174 田丸兵庫、うば桜獻上二付廻状」を見ることにする。

一筆申遣候、うは桜いそきほり候て、高岡へもち参あけ可申候、
御奉行玉井かもん殿御つき候て、御座候間、其心得尤候、山さく
らなどのあしきハ御用無之候、木なりよきうは桜計をほり候て、
此ぐミ中より三拾四五本ほといそき明日中にあけ可申候

殿様今日と山へ御座被成候、二三日之内ニ又高岡へ御帰候間、
其内ニわたし不申候へハ、御用ニ不立候間、其心得候へく候、為
其かさねて申遣候、木ニねん入候て、みなくとしてみつくるい、
うつくしくつゝみ候て、もたせあけさせ可申候、以上、

三月廿六日 田丸兵庫 (花押)

戸出

光明寺

才二

かいほつ

左衛門

太田

宗右衛門

(現代文訳)

『加賀藩初期十村役金子文書』(砺波市教育委員会)

一言申し付けたいことがある。うば桜を急いで掘り取り、高岡へ持參すること。御奉行玉井掃部殿が付き添つておられるので心得ておくこと。山ざくらなど性の悪い桜に用はないこと。木は格好の良いうば桜だけを掘つて、この組の十村らで三十四、五本ほど急いで明日中に献上できること。

殿様は、今日富山へ出かけておられる。二、三日の内にまた高岡に帰つて来られるので、その時に渡すことができなければ用をなさぬことになるので心得ておくこと。今一度重ねて申し付けるが、木は念入りに扱いみんなで吟味して美しく包装して持参させなければならないこと。以上。

三月二六日 田丸兵庫 (花押)

戸出村 又右衛門 (川合)
光明寺 才二
かいほつ村 左衛門 (安藤)
太田村 宗右衛門 (金子)

2. 金子文書と川合文書

金子文書の廻状と川合文書、『往昔御紙面等之写』を原文で比較すると数点の違いがある。

まず金子文書には、金子宗右衛門以外の三人の十村にカギ状の筆の跡がつけてある。川合家の古文書にはその印がない。

先般の正倉院展に「続々集正倉院古文書正集第41帙第1巻(東寺律衆解案など)一巻」という古文書が出品されていた。それをみると文字の上に「了」と朱書きされ、了解した意味で「了」と記したものと説明してあつた。既に「了」という文字が、確認の意味として記号的に使われていたことがわかる。

次に、川合文書には、文末に小さな文字で「メ五通 太田村

宗右衛門方ニ有之候写置
という添書きがある。これは郡奉行を含め、五通

の廻状を出したが、金子家にその書状が残してあるので後日、書き写した

ということである。

3. うばざくら

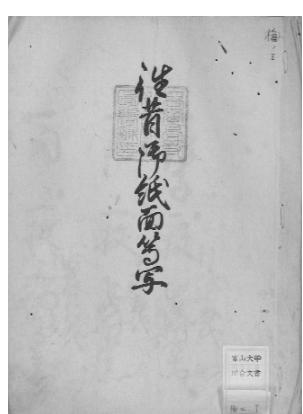
庄川流域の里山には、ヤマザクラ、エドヒガン、コシノヒガ
ンザクラ、キンキマメザクラなどの野生種の桜が自生している。
ここで献上すべき桜は、う・は・桜 (エドヒガン) とし、山・さ・く・らなどは用が無いと明記している。

牧野富太郎 (日本の植物学の父) は、自書『牧野新植物図鑑』
の中で「うは桜」について、

姥彼岸 ウバヒガンザクラの略。

姥 (老婆) は普通歯が抜けてしまつて無いものが多いが、本種も三月末に葉の無いうちに花を開くので歯無しと葉無しをかけて、ウバの名をつけた。江戸彼岸、東彼岸は、東国 (関東) のヒガンザクラという意味。

ヤマザクラなどは、葉が出てから花が開くが、エドヒガンは



『往昔御紙面等之写』の表紙

花が先に開く。雪深い北陸では、早春の里山が新緑に覆われる前に、エドヒガンが開花するので、雪解けの野山には、際立つて鮮やかである。

4. エドヒガンの自生地

富山県生物学会名誉会長であつた進野久五郎先生は、その著書『富山の植物（昭和48年）』のエドヒガンザクラのところで、「（前略）桜の大木はこのエドヒガンで、愛本明日の大桜、氷見十二町の駒つなぎ桜など、県市町村天然記念物指定の桜は全部本種の古木である。本種は中部地方以西九州の山地に自生するもので、県内のところどころの低山に一～二本の自生が見られる。庄川町の嵐山には群生しており、先の大木は、これらの山から移植したものであろうと思われる。」と記している。

富山県中央植物園の大原隆明（バラ科専門）主任は、全国に自生している桜をさまざまな角度から観察して調査されている。

エドヒガンが自生している環境に共通するのは、河川に浸食された里山であるという。富山県は、延長に比べて勾配の強い急流河川が多いためエドヒガンの自生地に適している。

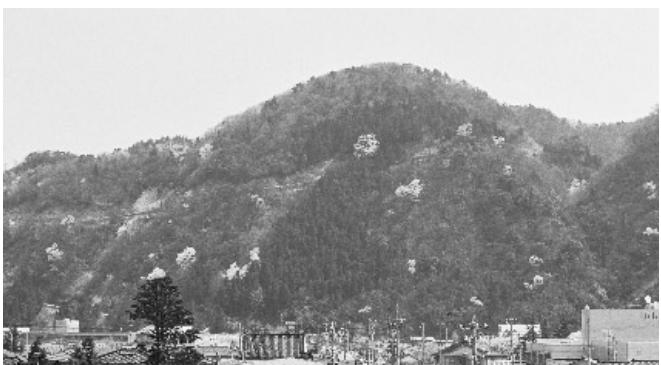
エドヒガン⁽⁴⁾が自生しているのは埼玉県内の荒川沿いや長野県諏訪湖から静岡県の遠州灘に注ぐ天竜川の長野県の川沿い、また岡山県西部を南流して瀬戸内海に注ぐ高梁川沿いなどがある。いずれの自生地にも共通するのは、河川に浸食された急斜面で

ある。

庄川においても、小牧発電所付近から宮森地区までの一帯の里山や庄川に注ぐ谷内川（落シ地区）、広谷川（庄川（三谷地区）、広谷川（庄地区）流域の里山である。

砺波地域をみると、コシノヒガンザクラの自生で有名な南砺市城端の池川には、向野のエドヒガン（南砺市野口）が自生している。かつては、この周辺に何本かのエドヒガンがあつたと聞いた。ここも岸と河川との高低差のあるところである。

現在、北海道にエドヒガンは自生していないが、その化石が発見されているため、かつて北海道にもエドヒガンが自生していたことは明らかである。



庄川町三条山に自生するエドヒガン

5. コシノヒガンザクラと桜馬場

うはざくら（エドヒガン）、そしてヤマザクラは、樹種を明記しているので、当時はこれらの違いを認識していたことが明らかである。

うはざくら（エドヒガン）とコシノヒガンザクラは、花が先に開くこととも、その開花時期もほぼ同じである。当時の十村らは、うはざくら（エドヒガン）の中に花が大きく、紅が濃くきれいに咲く桜があることを知っていたであろう。このため献上品としてうはざくら（エドヒガン）を選別する中、コシノヒガンザクラを選んでいたものと思う。

このように考えると、コシノヒガンザクラが高岡城の馬場に運ばれたであろうし、昭和初期に桜馬場でコシノヒガンザクラが発見されても不思議ではない。

今も、庄川沿いの庄川町地内には、自生するエドヒガンの中にコシノヒガンザクラが混在している。当時も同様に混在していたであろう。

6. 桜献上の三月二十六日

郷土史家佐伯安一氏は、加賀藩資料などの研究から『太田村史』第三章『高岡桜馬場の桜と宗右衛門』でこの古文書の年号



全国エドヒガン自生地（林弥栄作図参考）

の特定に関して、「(前略)宛名の十村四名が揃うのは元和二年(一六一六)以降、寛永十二年(一六三五)まであり、発信人の田丸兵庫(郡奉行)の名が金子文書に表れるのは寛永四年から同六年の間に限られるから、そのころのものとするのが妥当である。」と考察されている。

川合文書からも田丸兵庫が砺波郡の郡奉行として出てくるのは、寛永二年(一六二五)から寛永七年(一六三〇)の間である。ここでエドヒガンの開花時期から、年号の特定を推察することとしたい。庄川地域に自生する桜を開花順に比較するとエドヒガンはソメイヨシノよりも多少遅れて開花する傾向にあることがわかる。

富山気象台^(注5)が調査(一九五三年以後)したソメイヨシノの開花実績をみると、最も遅い年(一九八四年)で四月二十日である。寛永初年頃の自然環境は、今よりも寒く雪解けはさらに遅かつたはずで、里山の桜の開花も今以上に遅かつたことであろう。

三月二十六日という日付を新暦に置き換えて、エドヒガンが開花していたと想定される年号を考察すると、寛永三年(一六二六)が四月二十二日、寛永四年(一六二七)が五月十一日、寛永五年(一六二八)が四月三十日となるので、これらのいずれかの年に行われたものと考えられないだろうか。

桜の開花ごよみ

区分	3月			4月			5月		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
コヒガン									
キンキマメザクラ									
コシノヒガンザクラ									
ソメイヨシノ									
オオシマザクラ									
エドヒガン									
ヤマザクラ									
カシザン									
フゲンゾウ									

弁財天公園、庄川水記念公園(平成10年～平成18年の平均)

7. 加賀藩の十村

加賀藩の農政制度は、初めから明確な縦社会が成立していたわけではない。藩は改作法の施行によつて村を単位に一元的に収納することとし、その取立てを藩の代官として十村に一任していた。

前田利長は自らを補佐するため文禄四年（一五九五）から前田対馬が、また慶長十年（一六〇五）からは横山、奥村、篠原の三人体制で法令等をまとめるなどして藩政の体制を成立させてきた。

慶長十六年（一六二二）には当時、幕府の中枢を占めていた本多政重が加賀藩に臣下することになった。利長が、幕府と加賀藩との関係を調整する役割で、利光に付けたと考えられる。こうして、藩主である前田利光、年寄である本多組（本多安房守）や横山組（横山山代守）、そして各奉行、代官という藩の身分階層制が制度化してきた。年貢米の取り立ても利光の時代からは算用場奉行（のちに寛永五年頃から郡奉行）肝煎・惣百姓という組織が成立していく。

十村は、初め十ヶ村を裁許したので十村肝煎（とむらかきもいり）・十村頭（とむらがしら）といわれたが、後に単に十村というようになつた。郷村を支配する上で、農民の最高職で家格・持高・技量などが問われた。

慶長から寛永にかけて頭肝煎や郷肝煎・十村肝煎を勤めたと

伝える家は、ほぼ例外なく草分的長百姓か武家・公家の系譜を持つ土豪的百姓であつた。また能登末森の合戦で佐々成政と戦つた農民も前田氏に忠誠をつくし、加賀藩の御扶持人となり、十村分役である山廻役についた者もいる。川合又右衛門は武家の系譜を持ち、金子宗右衛門は藩政以前からの豪農・長百姓であつた。

8. 郡奉行、十村の所在地と管轄地

これら四人の十村が管轄地していた地域を「元和五年利波郡家高ノ新帳」^{〔注6〕}でみると、うはざくら（エドヒガン）が自生している庄川右岸の三条山や礪波嵐山を中心とする里山は川合又右衛門の管轄地である。その中腹には幹周りが三・五〇mの大木も自生している。その幹周りからそれ相当の樹齢であることが想像できる。

川合又右衛門は下中条から戸出に移つた後も、これら庄川右岸の里山を管轄地していた。この作業を実行した金子宗右衛門は太田に居住しているなどこれらの十村は庄川を挟んでひとつ

9. 研波郡の交通事情と物資の運搬

高岡城が築城され始めた慶長十四年（一六〇九）四月頃、川

合又右衛門が築城の仕事に敏腕を振るい伝馬や人夫の調達、藩の荷物や木材の運送、道や橋の修理、百姓の取り締まりなどを勤めたという記録が残っている。

また又右衛門は、付近の村々を裁許していたことから、五箇山から材木を切り出し、手伝い人足五十人を出すよう藩（奥村伊予守、横山山城守、篠島出羽守の連名）から命じられて、切り出した材木を沿岸の農民に流材の労役を課し、千保川（現庄川の旧本流）へ流して運んだ記録もある。

高岡にいた奉行田丸兵庫は、戸出の川合又右衛門や光明寺の才次、太田の金子宗右衛門らに運搬夫の動員を命じたり、その人夫を割当てたりした内容も『往昔御紙面等之写』に記録されている。

当時の陸路は北陸街道が主要道路であつたが、いずれも道幅は二間（三・五m）ほどであつた。

慶長十四年（一六〇九）に利長が高岡城を築いてから、金沢から石動通り、高岡への街道が整備されてきたようだ。

寛永初年の頃、砺波郡から高岡への道路網は、郡の北を横切る北陸街道が主なものであつた。砺波郡の村々から高岡への陸路はどのようなものであつたかは定かでないが、いかに運搬時間により短縮するかが重要な課題であつたと思う。

川合又右衛門や金子宗右衛門らは、年貢米を戸出に集めて舟運で、千保川（現庄川の旧本流）から高岡木町で小矢部川へと運び、それから金沢や大坂、江戸へ回送している。

庄川本流の変遷を見ると、その主流は野尻川から中村川、千保川へと東に移動している。当時は、千保川がその主流として流れていたようである。このように当時の川の流れは、舟戸渡（現・庄川合口ダム）辺りから幾本もの川筋が西方へと流れ小矢部川へ流れていた。今は想像もできないが、流れも定まらず、数え切れない川筋があつたとなれば、千保川の由縁もうなづける。

「二、三日のうちに」と作業にようする時間は限られている。当時は人足が足りたとはいえ、土木作業用機械のない時代である。三十四、五本の桜苗を選別するには、それ以上の苗木を用意して、選別しなければならなかつたであろう。掘り出すにも相当の人と時間を要したはずである。この一連の作業工程でも最も時間短縮を可能にできるのが運搬作業である。金沢と八尾を結ぶ街道の要所、舟戸渡付近で苗木を集め、年貢米同様に増水している千保川（現庄川の旧本流）などを利用して高岡へ舟運で運ぶのが、最善の方法と考えている。

10. 加賀藩と高岡城

慶長十年（一六〇五）二代藩主・前田利長（一五六二～一六一四）は、隠居するため富山城に入るが、空前の大火灾に見舞われ町とともに城は炎上してしまう。このため利長は、家康（駿府）と秀忠（幕府）に築城許可を願い出て、その許可を受けて慶長

十四年（一六〇九）に高岡城を築き隠居城とした。高岡城の規

ある。

模は、金沢城よりも総面積は小さいが、五つの曲輪くるわ（石垣や土塁、堀などで仕切った城の区画）があり、金沢城のそれよりも広く作られている。

高岡城が築城された場所は、千保川（現在の庄川の本流）や小矢部川から舟運の便もよく、砺波平野という穀倉地帯を控え、伏木や放生津という外港の要所とも密接で、藩内にある周辺の各城とも連携が取れるところである。大坂夏の陣、冬の陣の折は、加賀藩の重臣を配置する重要な拠点でもあつた。

元和元年（一六一五）に幕府が「一国一城令」を発したため、築城後わずか五年余りで廃城となつたが、鉛瓦を備えた瑞龍寺からも近く、石垣や堀を残したまま平城の様相を留めさせた。これは兵糧を備蓄すれば、戦闘体制に入れる気配を匂わせている。

家康は利家の没後、加賀討伐の策略をしたが、まつ（芳春院）は家康が要求する人質として江戸に下ることで前田家を守つた。その間に起きた関ヶ原の戦いで東軍に参戦しなかつた利長の弟、利政のことなどもあり、結局、慶長十九年（一六一四）にようやく、帰国することになつた。

ところで、豊臣家は大坂夏の陣・冬の陣で滅亡することになつた。その発端は慶長十九年（一六一四）に起こつた方広寺（京都市東山区）の鐘銘事件である。梵鐘に刻まれた銘文を徳川家への呪いの文として曲解されたことが原因であることは有名で

このような背景から、加賀藩は、幕府に対して廢城とした高岡城が城としての役割を失っていること、馬場が武術の練習場でなくなつたことを明らかにする必要があつたのだろう。桜を植えて花見の名所とするにしても、不注意なことで曲解される原因となつてはならないことである。

11. エドヒガンとヤマザクラ

「（前略）うは桜いそきほり候て、高岡へもち参あけ可申候、御奉行玉井かもん殿御つき候て、御座候間、其心得尤候、山さくらなどのあしきハ御用無之候（後略）」を別の角度から考察してみたい。

ここまで、うはざくら（エドヒガン）の「葉」を「歯」と掛け、「歯がない」と考えてきた。当時、前田家がおかれていた状況を考えると、「葉」を「刃」とも掛けて「刃がない」と解釈することで、徳川幕府に忠誠心を表したとも考えられよう。また、人質となつて家を守つた祖母「まつ（芳春院）」をイメージさせる配慮も、利常は意図していたのでなかろうか。

「山さくらなどのあしきハ御用無之候」の一行には、前田家の存亡が隠されていたと思う。

つまり、「葉＝刃」が先に出るようなヤマザクラなどは不吉であり、前田家としては、間違つても植栽してはならなかつた。

このような意味が込められたとすれば、この事業を遂行する者は、郡奉行と信頼の厚い十村だけに課せられた重要な任務であつたはずである。

12. 桜献上の史実と逸話化

佐伯先生は、太田村史で「桜あんころ」が世の中に果たした役割も考察されている。

この「桜あんころ」が販売されなくなつてから久しい。北陸線がまだ国鉄時代のことである。走つてきた汽車がプラットホームに入ると売り子らが弁当（駅弁）やお茶、みやげ物とともに、高岡駅では高岡名物「桜あんころ」が売られていた。

これが売られていたのは、大正九年頃から昭和三十九年頃のことである。しかし、特急列車が走りはじめ列車の窓が開かなくなつたため、販売方法は、車内販売へと変つていつたが、桜あんころは、車内販売せず廃業されたといふ。



「桜あんころ」のラベル

その包み紙のラベル

の裏に「桜あんころ」

の由来が書かれていた。
(注)

その由来の概略は、

城端にある桜ヶ池の靈

水を使つているため、

その香りや味わいが良

く栄養が豊富な一種独特のあんころ餅であり、その美味しい桜あんころの由来をたどると、金子宗右衛門の桜が献上された時に遡るものだという。

このように桜献上の史実は大衆に広く知られるようになり、今に語り継がれることになった。

13. 伝説と郷土の文献

富山県のさまざまな伝説が、『伝説とやま』にまとめられている。その中には植物に関する伝説が一四〇篇余り収録されており、この逸話も「名勝桜馬場」として収録され、その出典を『越中志徵』としている。『越中志徵』は、幕末から明治にかけて加越能三州の郷土史研究に偉大な足跡を残した森田柿園（一八一九～一九〇八）が弘化の末あるいは嘉永の初頭から約三十年の歳月をかけて編さんしたもので、石川県図書館協会から復刻されている。それには、桜馬場について次のように記されている。

櫻馬場

蘭山私記に、高岡櫻馬場は慶長十五年出来。

其節被為植山櫻の苗は、太田村宗右衛門より指上。右褒美として御紋付の上下頂戴すといへり。○故墟考に、櫻馬場長きこと三百間、兩邊數千の白櫻を植ゆ。今猶依然たり。○瑞龍閣記にも、老櫻群列馬埒。毎春開花玲瓏欺雪。足鼓詩脇。相傳延寶中。埒櫻

樹老多枯槁。故命武藤半左。國府助右。再植之。○元祿十三年の句空草庵集に、高岡馬場の櫻さかりなり。去年の秋紅葉にて見せし事、本意なとして、十丈子しきりに席をすゝむ。

十二里をたゞ飛こゆる花見哉
句空
空地も幕にこわるのとけさ
十丈
ぬけ藏も出替時はさしあいて
野角

金子文書にも川合文書にも「うは桜」と記されているが、既に江戸中期に書かれた『越中志徵』には「うは桜」という記述はない。時代は遡るが、安永九年（一七八〇）の『越の下草（宮永正運著、富山県郷土史会復刊）』にも「吉野桜」と書かれている。

このほかの古い書物に、桜馬場の記述があるが、「うは桜」と記されたものがない。いずれもその偉業の主眼は、桜を殿様に献上したことであつて、桜の樹種が何であつたかということは、重要なことではなくなつた。

14. コシノヒガンザクラの発見

昭和に入り、砺波中学校（現・県立砺波高等学校）の御旅屋太作（一八八一～一九四二）先生が桜馬場で新種の桜を発見された。

コシノヒガンザクラは、御旅屋先生が昭和三年（一九二八）に桜馬場で発見し、さらに昭和四年（一九二九）には勤務先で

ある砺波中学校の校庭でも採取され、京都大学理学博士・小泉源一氏に調査依頼された。昭和五年（一九三〇）に蓑谷蠶山で野生種の桜を新たに発見され、それも小泉博士に調査依頼された。いずれもコシノヒガンザクラであったことから、小泉博士は昭和七年（一九三三）にこの桜を新種コシノヒガンザクラと命名して学術雑誌『植物分類・地理』で発表された。

高岡城桜馬場は、昭和三十年（一九五五）に残念ながら桜並木の老朽化と都市計画事業によつて昭和三十年十月に廃止され、現在は県道となつていて。エドヒガンとコシノヒガンザクラを観察すると、樹形や幹、枝振りで次のようないが分る。

まずエドヒガンは根元から幹は一本だけ伸びるようである。そして幹の途中から数本の枝が横に広がり、その枝から伸びる枝は曲がりながら上に伸びるようである。

しかしコシノヒガンザクラは、根元から数本の幹が伸びる。その幹から伸びる枝はエドヒガンと同様に横に広がるが、その枝から伸びる枝はその枝に対して直立して上に伸びるようである。

現在残つている桜馬場の写真^{注9)}を見ると、桜並木の樹形からは、コシノヒガンザクラであろうということで大原氏の見解と一致することとなつた。

桜馬場に献上されたエドヒガンは、寿命も長いことから桜馬場に残つていても不思議ではないはずである。しかし、そのエドヒガンの大木が存在していたという話や移植された桜にエド

ヒガンがあつたという話を聞くことができなかつた。

また、当初、桜馬場へ献上したのが三十四、五本であつたとしても、この馬場を彩る本数ではない。桜馬場植栽の記録として『末広町史』によれば、延宝年間（一六七三）に桜や松を補植するなどして絶えず保護を加え、それらは順調に成長し延亨の頃（一七四四）には花の名所であつたといふ。

15. コシノヒガンザクラの発見とその後

近年、富山大学理学部植物分類学の鳴橋直弘教授らは、その染色体の数から交配の起源に迫る研究をされている。その詳細について『とやま植物物語』に次のように記述されている。

城端町をはじめ、高岡市、大沢野町、八尾町、細入村でも自生が認められた。そして、それらの場所にはエドヒガンやキンキマメザクラも見られること。また、それら三種の花期がオーバーラップすること。さらに、葉や花の形態を比較すると、富山に分布している他の桜よりもそれに三種の関係が深いこと。などから、コシノヒガンザクラはエドヒガンとキンキマメザクラの雑種であるといふ確信を持つにいたつた。

一般に植物は二倍遺伝情報を持つており、雑種も父から一倍、母から一倍受け継ぎ一倍持つてゐる。桜は染色体が

十六本あり、二倍体植物である。しかし、コシノヒガンザクラの場合、十六本のものと二十四本のものが見つかつた。二十四本のものは三倍持つてゐることになる。これを三倍体といふ。この場合、父から二倍体と母から一倍体の三倍雜種か、父から一倍体と母から二倍体の三倍雜種かの両方が考えられる。

この仮説に対応するように、コシノヒガンザクラには形態的に三つの型があることがわかつた。一つめは古城公園型、二つめは、蓑谷大型、三つめは、蓑谷小型である。広く日本中にコシノヒガンザクラとして植えられているのは、古城公園型である。

なお、庄川流域のコシノヒガンザクラは、その花弁や萼片、葉の様子から高岡古城公園のものに類似しているようである。しかしながらコシノヒガンザクラは、その交配によつてエドヒガンに近いもの、あるいはキンキマメザクラに近いものといろいろあるようだ。今後、大原主任は樹種を特定する判断材料として、花弁ばかりでなく、葉身や葉縁の鋸歯を比較して、研究すると聞いてゐる。

富山県には野生種の桜が十一種類あるうち、九種類も自生しているといふ。

県内で発見されたコシノヒガンザクラのほかにも加茂善治先生（県内の農学校長を務め、昭和十六年より東京高等農林学校

コシノヒガンの2型と推定両親分類群の葉



エドヒガン



Prunus spachiana



キンキマメザクラ



Prunus incisa var. kinkiensis



コシノヒガン
(古城公園型)



コシノヒガン
(城端彌山型)

1cm

(県立中央植物園：大原隆明 作図)

(現東京農工大学) 教授となる。) が発見されたフタカラミザクラがある。最近のマスコミ報道から県内では、いろいろな桜の新種が発見されている。これらの報道を聞くにつけ、富山県はとても桜に縁の深い土地柄だと感じている。

富山県中央植物園の大原主任は、コシノヒガンザクラについて、その著書『サクラハンドブック』の中で「コシノヒガンは雑種の総称であり多様な型が含まれる。(中略) またタカトウコヒガンもコシノヒガンの一型である。」と述べ、今後ともコシノヒガンザクラの型の調査とその分布についても関心があるとされている。大原主任の調査研究が県内の自生地の確認に終わらず、全国的にその植栽されている経緯も含めて系統別に明らかになれば、より歴史的な資料が裏付けられるのではないかと楽しみにしている。

終わりに

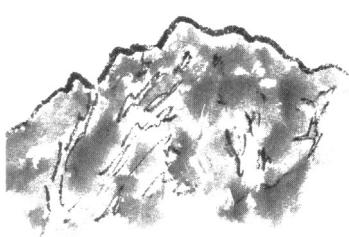
この私論は、一枚の古文書を読む機会を得ることから始まった。このような関心を持つたのも、ナチュラリストの松岸得之助さんからものを見る目、何事にも関心と疑問を持つことを教わったからだと思う。

この私論を立証する歴史的物証は不十分である。すべては状況から推測したもので、これを裏づける資料調査は、これからも研究していくなければならない。今回、私はたくさんの方々

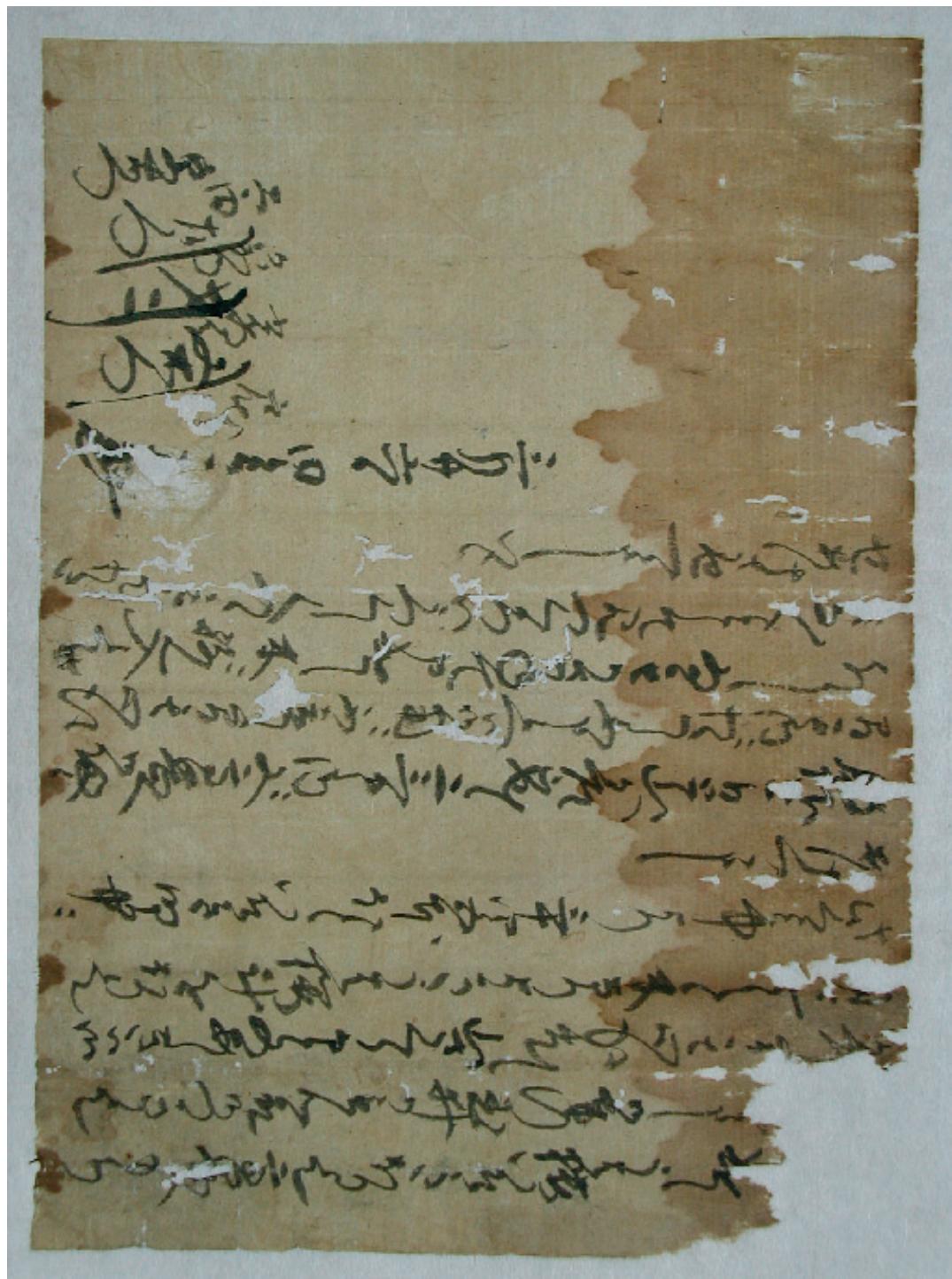
に出会い、数多くの資料を読むことができた。

身近に自生する桜を観察するばかりでなく、郷土の歴史を知ることから自然觀察に深みと愛着が持て、自分なりの考えを持つこととなつた。

今後とも皆様方からのご叱正やご指導をお願いしたい。この稿を成すにあたり、高岡市立博物館長晒谷和子さんや富山県中央植物園主任大原隆明氏、郷土史家佐伯安一氏、尾田武雄氏をはじめとする多くの方々からご教示や助言をいただき。また、砺波市教育委員会を始め、砺波市立図書館では各資料の照会を、富山県公文書館では古文書読解の指導を受けた。金子文書については金子喜久子さんに、川合文書は富山大学附属図書館のご厚意とご理解によるものである。ここに心から感謝を申し上げる次第である。

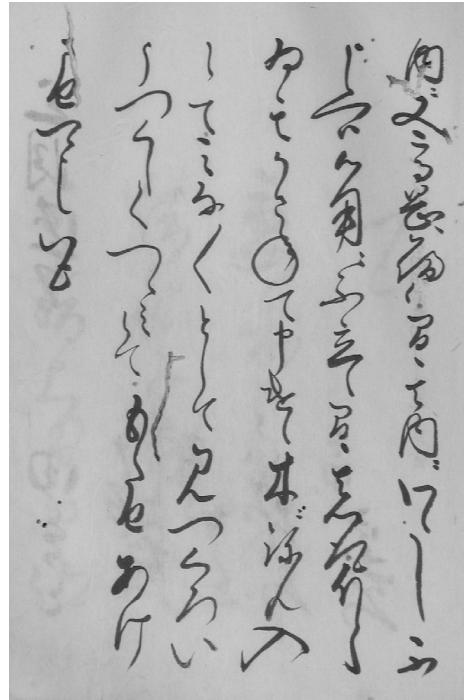
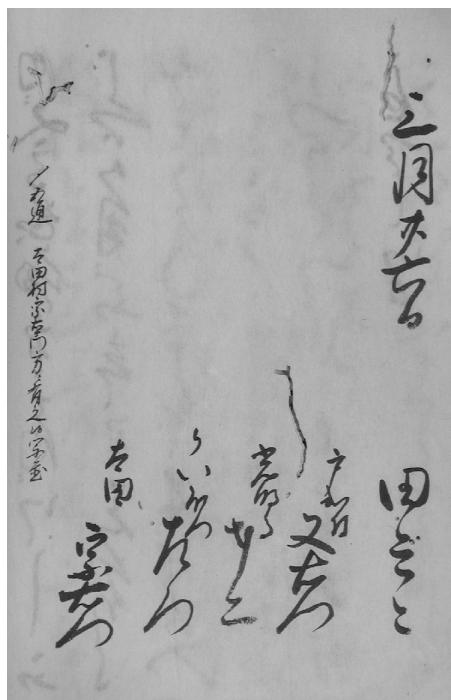
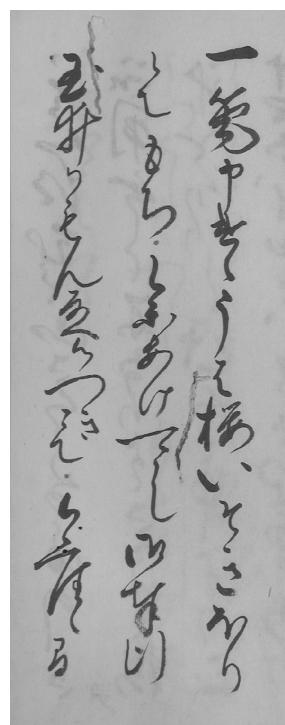
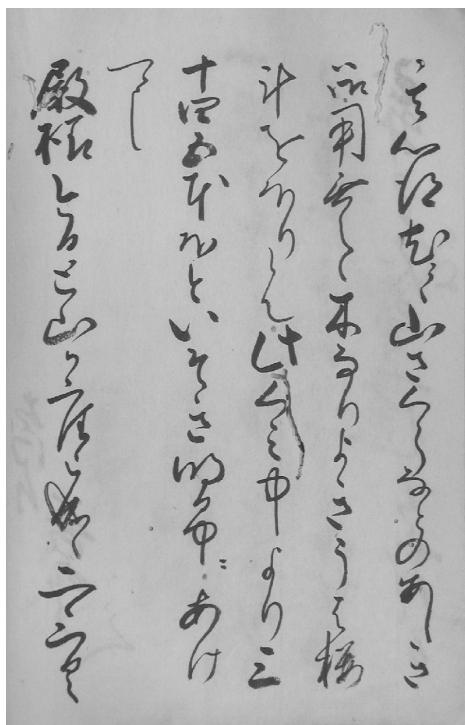


【注】2 金子文書「174田丸兵庫、うば桜献上二付廻状」



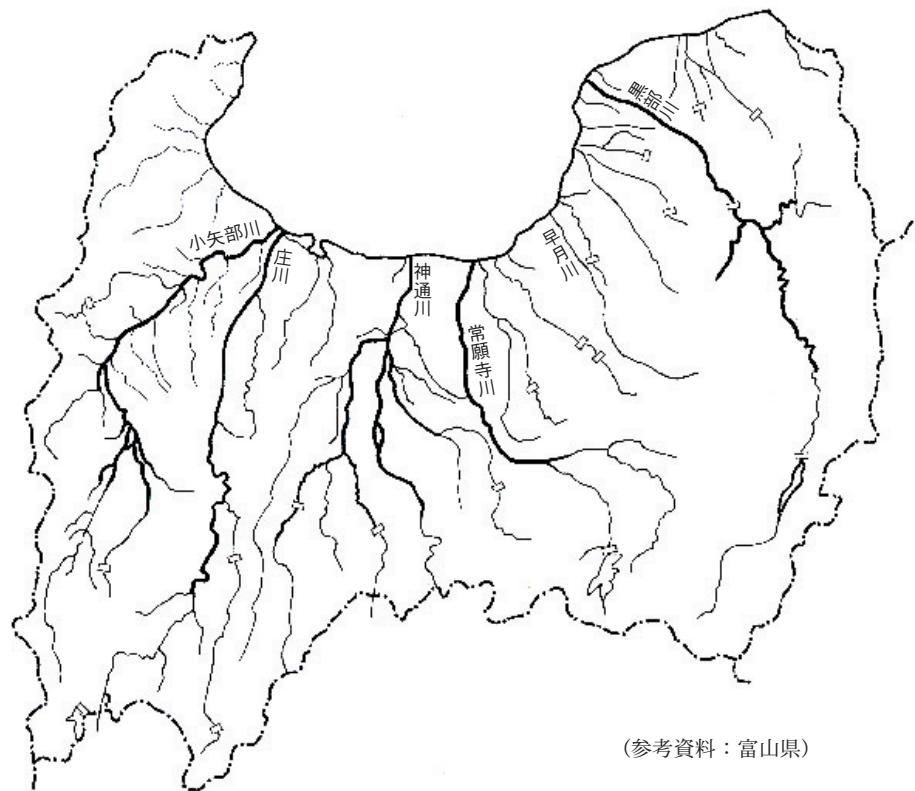
[注] 1 土藏9号 p. 18 ~ 34

[注] 3 川合文書 「往昔御紙面等之写」

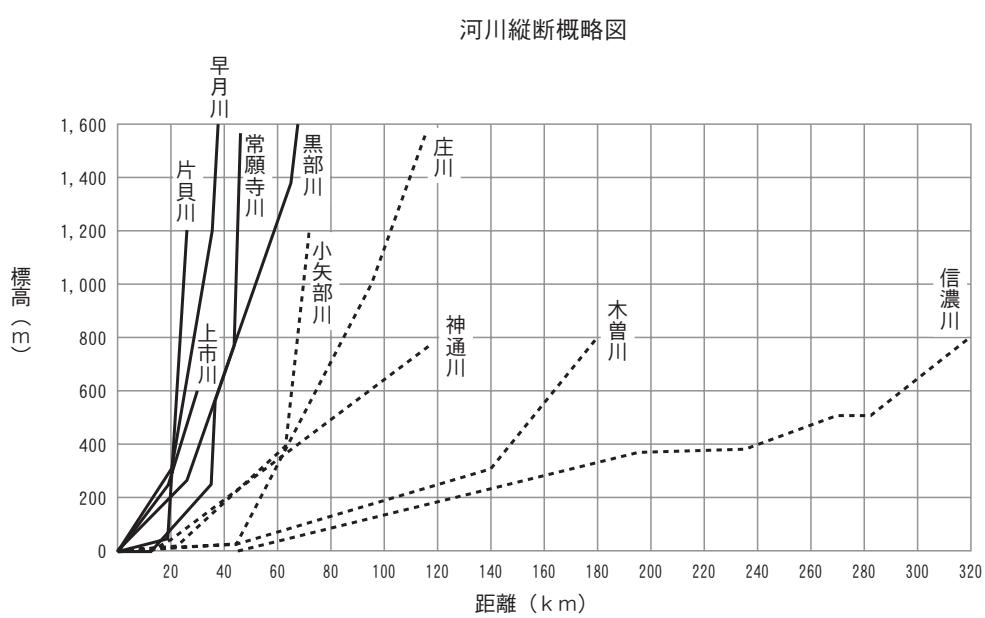


「富山大学附属図書館蔵」

【注】
4-1



【注】
4-2



(参考資料：富山県)

富山のサクラの順位(開花、開花から満開までの日数)

最終更新日:平成20年4月11日

富山のサクラの順位(統計年1953-)			開花から満開までの日数(統計年1953-)				
開花の早い方からの順位			開花の遅い方からの順位				
順位	月	日	順位	月	年		
平年値	4	月 8 日	平年値	4	月 8 日		
1位	3	月 26 日	2002	1位	4	月 20 日	1984
2位	3	月 29 日	2004	2位	4	月 17 日	1970
3位	3	月 29 日	1989	3位	4	月 16 日	1965
4位	3	月 30 日	2007	4位	4	月 16 日	1957
5位	3	月 30 日	1998	5位	4	月 15 日	1978

短い方からの順位			長い方からの順位				
順位	日	年	順位	日	年		
平年値	4	日	平年値	4	日		
1位	2	日	1970	1位	9	日	2007
2位	2	日	1969	2位	8	日	1966
3位	2	日	1956	3位	7	日	2003
4位	3	日	2004	4位	7	日	1996
5位	3	日	1990	5位	7	日	1972

(資料:富山地方気象台)

・太田村 金子宗右衛門

金子宗右衛門は近世以前から現在の砺波市太田村に移住していた豪農で、前田氏入部早々から御用を勤めていた十村肝煎であつた。戸出村又右衛門と同様に前田利長が慶長十四年(二六〇九)に高岡築城のため木材の川下しをしたり、また鷹狩の宿もしたりしている。十村役は、元和二年から寛永十二年まで父子二代にわたって行い、以後は村肝煎や組合頭をしている。

・戸出村 川合又右衛門

川合又右衛門の川合家の出自は明らかでないが、武士の出だという諸説もあるようだ。川合家歴代記によると砺波郡中条村の百姓、道林の子、又右衛門は慶長九年(二六〇四)、加賀藩に十村が創設された時に十村として任せられている。また、慶長十四年(二六一〇)前田利長が高岡築城のおりに木材を伐採して搬出する手伝いもさせられている。元和三年(二六一七)に下中条村から戸出野開拓のために移住の後、砺波郡最高の御扶持人十村を勤めて幕末を向かえた。

・開発村 安藤佐衛門

慶長十四年三月、前田利長が居た富山城が焼失したため越中川西三郡に出銀を求めているが、その目録に名前が出てくる。その後、寛永十二年(二六三五)まで十村役を勤めたとある。御扶持人十村の宮丸村安藤家はこの家の分家である。分家の安藤家は寛永十二年(二六三五)の組替えで十村に選ばれ、二代目は戸出村又右衛門とともに改作法の推進に尽力した。そして承応二年(二六五三)無組御扶持人十村となり、以後幕末まで勤めた。

・光明寺 才二

金子文書によると元和八年(二六二二)から寛永八年(二六三二)まで、十村の役儀として出てくるので寛永八年の組替えまで勤

めたのである。

(参考・富山県史 通史編・近世)

【注】7 磯波嵐山

『雄神村誌』には、「明治四十二年（一九〇九）皇太子殿下の行啓を記念して磯波嵐山あるいは小嵐山と命名した。」と、そして「弁財天公園から庄川合口ダム周辺を眺める神原山、加羅谷山一帯を望む景色が京都の嵐山に似ている絶景であることから、その名がつけられた。」とある。その山は三条山より南方に位置する山頂を指す。

【注】8 この由来書きは、当家初代の今庄作次郎が昭和十年の春にある書道家に口頭で話をし、それを清書したものという。

今庄 節子 談（平成十九年八月）

（印）桜あんころ由来

抑も桜あんころの源流を探るにいとも床しき傳縁なり

頃ハ慶長の昔前田利長卿志貴野ヶ原に居城之折り

長程二百四十餘間幅九間餘之馬術射的練習場を設けられ

其際周囲之土堤に世にも香る大和国吉野桜を

砺波太田の郷庄屋宗右衛門献納移植す藩主喜悦

其の志と労を稿ひ祝餅を分配せらる

當時移植の桜樹今尚古木繁茂昔緑の佛を存す

春ハ爛漫たる花人を釀しむ 夏ハ緑陰深く暑を覚えず

秋ハ紅葉錦を織り、冬ハ六花皚々一層の奇觀なり

我國稀る桜花の名所なり

從来古來の伝統由緒ある桜ヶ池の靈水を用い

風味佳良滋養豊富一種独特の餅一子相傳の秘法を以て今日ニ及へり

自然高岡最高の名物となり大方諸君の賞賛と博す桜あんころ由来爾云

花より軒主人
昭和十星次乙寅春抄

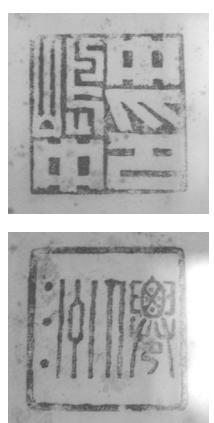
七十九八歳

懽州中識

（印）
（印）

こしのひがんざくら

【注】9



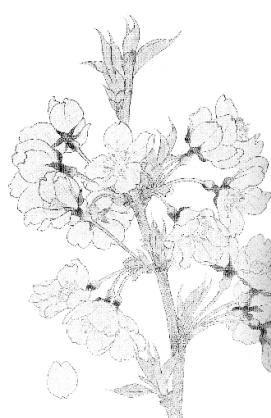
調査委員 御旅屋太作

上記印鑑は、由来書を書かれた書家の落款であるが、誰の者か不明である。

この櫻は昭和四年春、理學博士小泉源一先生により、命名せられたものにして、「こしのひがん」 *Prunus Kosiensis* Koidz. nov. sp. と称せらる。原産地及び分布につきては、今後の調査に俟たざるべからざるも、縣内各所にその植栽を見る。而してその最も多く群植せられ、且老樹の多きは高岡櫻馬場公園とす。

該樹は、喬木にして幹圍一米以内、稀に約二米に及ぶ。「たちひがん」の如く大形のものを見す。樹勢は大抵二三米の所より枝幹分歧して繁茂す。樹皮は黒褐色にして稍々縦條を帶ぶ。

葉は長橢圓形にして長さ八糞、幅五糉に及び、葉脈は七乃至十一對、葉緣は重鋸歯、葉の裏面及び葉脈に毛あり。葉柄は約一糉内外、蜜腺は二個、托葉の長さ約一・三糉なり。



花は密に生じ甚だ美なり。繖形花序にして一花序に二個乃至四個あり。

苞は花期宿存すること「こひがん」に似、花梗の下垂すること「たちひ

がん」の如し。花梗の長さ、一・八糰乃至二・二糰にして萼と共に毛あり。花徑は「たちひがん」「こひがん」よりも大型にして三・三糰乃至三・七糰。萼筒は下部膨れて球状をなす。花瓣は長さ五・五糰、幅四・三糰に達するものあり。雄蕊は二五個乃至三十個、雌蕊は雄蕊の最長のものと同長にして、花柱の中央より下に粗毛多きこと「こひがん」に似たり。柱頭は「こひがん」よりも黄多し。果ほとんど結實せず、稀に結實する樹木もあるも、その果實の数僅少なり。

花は葉に先ちて生じ、「たちひがん」と異なり花瓣は水平に近く開出す。

文・富山県史蹟名勝天然記念物調査報告第十号
図・富山県史蹟名勝天然記念物調査報告第11号

【注】 10

桜の樹形

サクラの樹形を大きく分類すると傘状、盃状、広卵状に区分できる。

また、このほかには箒状、円柱状、球状あるいは枝垂状にも分類されている。

「エドヒガン」や「ヤマザクラ」、「コシノヒガンザクラ」は傘状であり、「カンザク」、「カランザン」、「フゲンゾウ」は盃状である。ただし植物はその生育環境によって、自然樹形にならない場合もあることを知つておくべきである。

■ サクラの形態



(資料：日本桜の会)

【注】 11



末広町史 P11 昭和50年12月発行 (高岡市末広町二区町内会)



開町370年・市制施行90周年記念写真集 P107 (明治の頃)

昭和54年9月発行 (高岡市)

主な参考文献

「高岡市史」	牧野富太郎著『牧野新日本植物図鑑』	石川県図書館協会	昭8
「砺波市史」	砺波市史編纂委員会	高岡文化會	昭9
「中田町誌」	中田町誌刊行委員会	高岡市史編纂委員会	昭34
「伝説とやま」	北日本放送株	昭35	3 12
「戸出町史」	高岡市戸出町史編纂委員会	昭40	.
森田 柿園著『越中志徵』	石川県図書館協会	昭43	.
大井次三郎・太田 洋愛著『日本桜集』	昭44	5 復刻	.
進野久五郎著『富山と植物』富山文庫I	巧玄舎	昭46	.
内田 正男編著『日本暦日原典』		昭47	.
「末廣町史」	高岡市末広町二区町内会	昭48	.
「加賀藩初期十村役金子文書」	砺波市教育委員会	昭49	.
「越中たかおかふるさと史料抄」	高岡市児童文化協会	昭50	.
「開町三七〇年・市制施行九〇周年記念写真集」高岡市	昭51	.	.
宮永 正運著『越の下草』	富山県郷土史会	昭52	.
「日本のサクラの種・品種マニュアル」財日本花の会	昭53	.	.
「富山県史(通史編・近世)」	富山県	昭54	.
林 弥栄著『サクラ』カラーフォト大図鑑	昭55	.	.
「高岡古城公園の自然」高岡生物研究会、高岡地学研究会	昭56	.	.
「太田村史」	太田村史刊行委員会	昭57	.
塩 照夫著『富山県歴史の五街道』	昭58	.	.
田川 捷一編著『加越能近代史研究必携』	昭59	.	.
「土蔵」第9号	砺波郷土資料館土蔵友の会	昭60	.
鳴橋 直弘編著『とやま植物物語』	昭61	.	.
勝木 俊雄著『日本の桜』ベストフィールド図鑑	昭62	.	.

砺波地域の主なサクラ



エドヒガン



ヤマザクラ



キンキマメザクラ



ソメイヨシノ



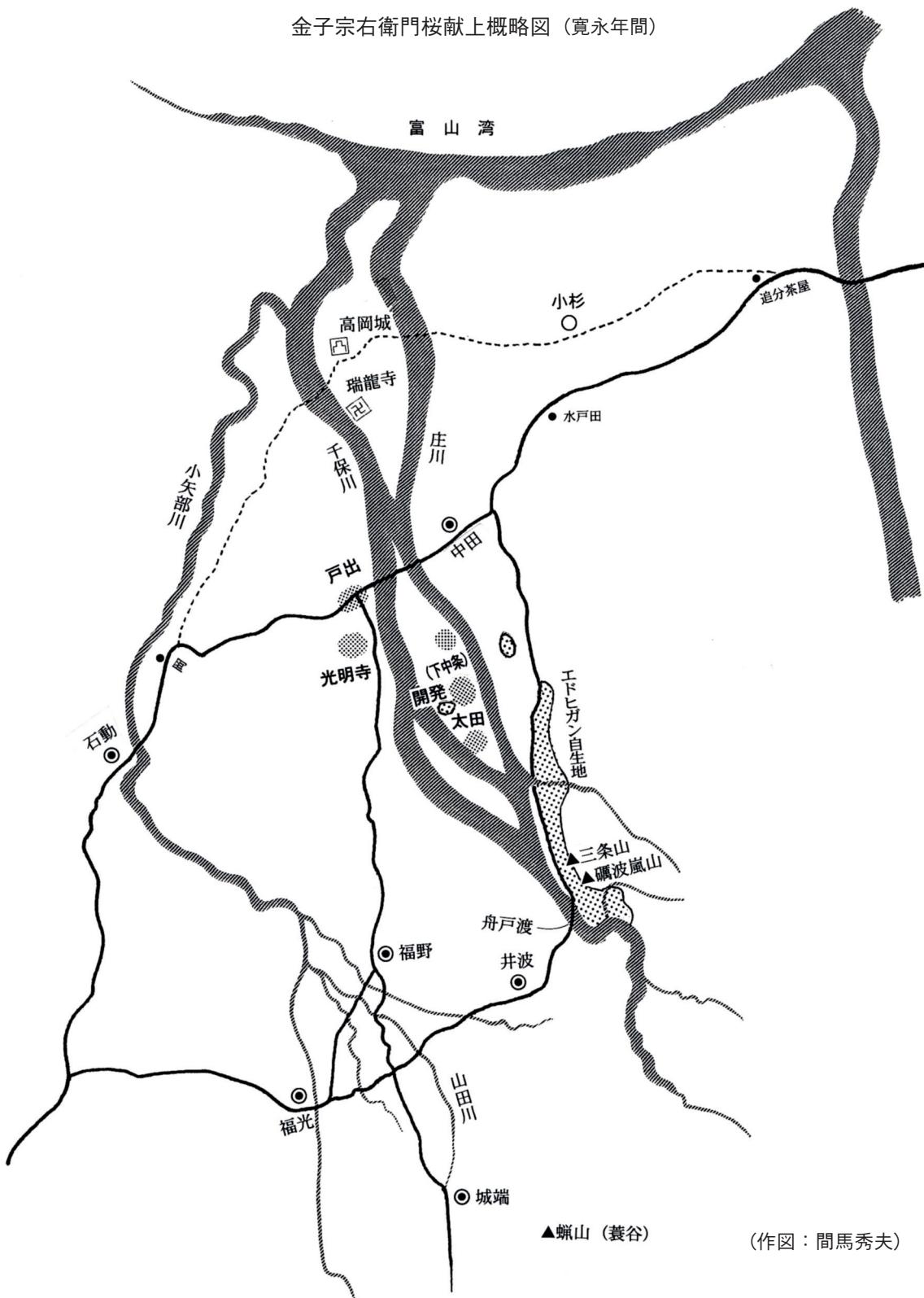
コシノヒガン（南砺市蓑谷）



コシノヒガン（普及型）

(写真提供：大原隆明)

金子宗右衛門桜献上概略図（寛永年間）



(作図：間馬秀夫)